



学校だより

名古屋市立
高針台中学校
R6.3.15 NO.11

☆ 全校集会

先日行われた、全校集会での校長講話をご紹介します。

スポーツフェスティバルやICT委員会、高中ブロッククリーンフェスといった新たな取り組みを企画・運営してくれた3年生が、卒業をしました。

今日は、不安を抱えながらも次のステージに進む3年生を勇気づけるために卒業式の式辞で話した内容をみなさんにも紹介します。

民間による月探査計画を進めている日本の宇宙ベンチャー企業、「i s p a c e」代表、袴田武史さんのお話です。

この「i s p a c e」という会社は、令和4年12月にミッション1として打ち上げた月着陸船を、4カ月半をかけて月面着陸させようとしたのですが、令和5年4月に着陸船との通信が途絶えてしまい、残念ながら着陸させることができませんでした。

この結果を記者会見で報告する際、袴田さんは月着陸船が月面着陸できなかったことを「失敗」という言葉を一切使わずに、「着陸までのデータを得られた。大きな一歩だ。」と話しました。

後に、「失敗」という言葉を使わなかった理由を聞かれて袴田さんは、「着陸が完了できなかったことに対して複雑な気持ちはありますが、次につなげることが重要なので、あくまでもプロセスの中で起きた出来事と捉えていました。」と答えました。

続けて、「この事業を継続するために、『どうしてそのような結果になったのか』というデータをしっかりとることが成長のプロセスの中では非常に重要だと思います。」と答え、今年の冬に打ち上げ予定のミッション2に向け、現在月面探査車も開発中だそうです。

私たちは、思い描いていた結果とはならなかった場合に「失敗」と捉え、そこに至るまでの取組の全てがよくなかったのではないかと自身を責めてしまいがちです。この否定的な考え方が影響して、「失敗」をできるだけ避けたいと考える傾向があると思います。実際、みなさんは「気付いている？こころのSOS」のアンケートで、各学年35%前後の人たちが「失敗をしてしまうのではないかと不安になる」と答えているので、「失敗を避けたい」と考える傾向は理解できると思います。

でも、袴田さんは、「失敗」とは、目標を達成するために取り組むプロセスの中で起きる出来事であるとともに、成長するための非常に重要な出来事であるとも捉えており、みなさんが感じている「避けるもの」とは正反対の「生かすもの」と考えていました。

袴田さんは、今後に向けて次のように話しています。「今回のミッション1では、最後に着陸こそ完了できなかったものの、非常に上手くいったと思います。今までは卓上の計算のみで、本当にどこまでできるか分かりませんでした。でも実際にやってみて、そこまで行けるというのは分かったので、非常に月が近くなったんじゃないかと思います。」

みなさんは、袴田さんの話を聞いてどう感じましたか。「失敗」を否定的ではなく肯定的に捉えており、言い方を換えれば、「失敗」は「ピンチ」ではなくむしろ「チャンス」だと考えているように私は感じました。袴田さんは、ミッション1での「失敗」という出来事をミッション2に向けたエネルギーにしていると思います。

みなさんの周りにはいる大人は、全員数え切れないほどの「失敗」を経験しています。だからこそ、「失敗」を恐れることは決してありません。

「失敗」を恐れることなく、3年生の築いてきた道を発展させてください。それが、3年生からのバトンを受け継ぐことにつながっていくと思います。